

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1 / 1)

研究題目	深淵から光へ：シベリア抑留の音楽と芸術、記憶と未来への継承のための新しい表現による研究成果の社会実装	報告書作成者	森谷理紗
研究従事者	森谷理紗		
研究目的	<p>本研究は、戦後における日本人のシベリア抑留という歴史的事象を芸術、特に音楽学的見地から再検討し、アートの社会実装という現代的アプローチから、次世代への歴史継承のツールを構築する試みである。</p> <p>第二次世界大戦後、満洲や千島列島などで終戦を迎えた 60 万人あまりの日本人兵たちはソ連軍によってシベリアやモンゴル各地の収容所に輸送され、その後数年に渡って様々な労働に従事することとなった。このシベリア抑留を経験したのは多くが当時 20 歳前後の青年たちであったが、その方々の平均年齢も現在 100 歳となり、生還者の最後の世代の方々から生の声を聞くことさえ困難な段階に達している。だが、「極寒」「飢餓」「重労働」のいわゆる三重苦で知られるシベリア抑留の体験者たちは、その辛い体験と帰還後の日本でも「シベリア帰りはアカ」と厳しい目で見られたことから過去について沈黙を貫くケースが少なくなく、その実態についての全体像が語られないまま歴史が消滅する危機を迎えている。しかしながら、文化・芸術の面からシベリア抑留を見ると、生きるための糧としてシベリア各地で詩歌・彫刻・絵画・音楽などの創作がなされ、現地人との様々な異文化交流が行われるなど、人間と芸術の根源的な結びつきを実証し、国境を越えた人々の交流による芸術のソフトパワーの可能性を示す重要な事例であると言える。</p> <p>こうしたことから、次世代への歴史継承という喫緊の課題に対して、当事者たちの行なった文化創造活動に着目し、彼らの残した記憶や記録を紐解き、残された作品を現代に鳴り響かせることで、当事者の「声」や「語り」に代わるものを生み出すことを着想した。これまでのロシアの公文書館や日本国内の元抑留者の音楽家らへのインタビューその他の調査から、収容所で実際に歌われていた歌や結成された楽劇団や演芸会、文化コンクール等に関する文化創造活動の実態が明らかになっており、本プロジェクトでは研究成果のアウトリーチを地域、教育機関、資料館などに働きかけながら行うことを目的とした。具体的には、(1) 当時の音の鳴り響きを再現する「収容所の音のランドスケープ」の構想を実現するにあたり、復元楽器(白樺のヴァイオリン)製作を行い、またその楽器の音源を録音し展示する、(2) ロシアの公文書で入手した手稿譜を演奏可能なものに編集し、レクチャーコンサートにおいて初演する、(3) 収容所の中で歌われた歌を編纂し配られた「ソヴェート歌曲集」を音源化し、アーカイブ化する、ということを中心に計画した。音や作品を通したシベリア抑留への記憶の表象を分析し、その成果を企画展として「見」「聞き」「感じる」ことのできるものへ変換する社会実装の試みである。</p> <p>さらに現代作曲家によるシベリア抑留をテーマにした新たな作品づくりから、現代的な歴史継承の表現方法を模索する。</p>		

## 研究内容

シベリア各地の収容所では、最初の厳しい冬に約1割の6万人の死亡者が出た。しかし、その時期を越すと次第に労働の合間に抑留者の自己表現としての詩句・歌・絵画等の自発的な創造活動が各地で芽生えていった。木彫りのスプーンや仏像、日記のようにしたためられた詩歌などの個人的なものはやがて小さなサークルの形成に繋がっていった。

さらに捕虜たちの要望を受けて慰労のための演芸会が催されるようになると、元より芸術を政策に利用していたソビエトはこれを認め、次第に思想教育を目的とした様々な文化的活動の一手段として戦略的に楽劇団を組織し、地区における収容所の巡回演奏やいくつもの地方文化コンクールが行われるに至った。

文化芸術はソ連の共産主義思想の主要なプロパガンダツールであり、「武器」とみなされていた。そのため、文化水準の向上は重要な課題であり、外国人収容所においてもそれが反映されていたのである。こうした背景から、日本では音楽や演劇の経験がない人々が生まれて初めて自ら演じ、あるいは創作するという状況が起こり、映画を初めて見る者がおり、さらには日本では学校に行けなかった人がカタカナサークルで文字を書けるようになったなど、多くの日本人が図らずも異国の地で多様な文化的体験をした。ロシアの公文書館所蔵の帰国直前の日本人によって書かれた感想文にも、コンクール優勝のために労働免除で音楽・演劇・舞踊の練習が日夜行われ、ロシア人の収容所長自ら演技歌唱指導をしたことが思い出として書き残されている。

また、日本の音楽史の脈絡の中でシベリア抑留を捉えると、さまざまなジャンルの音楽に影響があったと言える。まず、クラシック音楽では、戦前から音楽活動を行いシベリアでは「沿海州楽劇団」として専門的に活動したチェリストの井上頼豊、ヴァイオリニストの黒柳守綱、声楽家の北川剛らが、帰還後にロシア音楽を日本に紹介していった一連の流れは重要である。そして、一般的な大衆の層では、各地の収容所内ではロシアの歌にさまざまな日本語訳詞が施され歌われたが、これらの歌は多くの帰還者たちによって日本に伝播され、戦後のうたごえブームのレパートリーを中心となった。彼らを技術的に底上げし指導していたのは、先に挙げたクラシック系の音楽家たちであった。そしてポピュラー音楽界においても歌手の三波春夫や青木光一、作曲家の吉田正をはじめ歌謡曲の黎明期に活躍する人物も少なくなかった。このように、多角的に見てもシベリア体験者の音楽家や、彼らの収容所における音楽体験が戦後の日本に与えた影響の大きさは計り知れず、越境の地に連なる日本音楽史の隠された歴史として日本人のシベリア抑留体験は重要なトピックである。

今回の研究助成では、上に述べてきたシベリア抑留の音楽学的研究の成果をもとに、音楽や芸術のソフトパワーについて検討し、歴史継承に有効な媒体としての音楽の可能性の模索をするプロジェクトを行うこととしている。オーラルヒストリーの当事者である語り部が僅かになった今、歴史の追体験を可能にするのが、創作物であると考えられる。例えば歌の歌詞に綴られた当時の状況や心境の表現から、我々は彼らの環境を知り、あるいは作者の感情を感受して、理解することができる。アートの社会実装は近年注目されているが、アートを通じて社会にメッセージを発信するという方法は、歴史を後世の社会に伝える目的にも有用であろう。

研究のポイント	<p>本プロジェクトは研究者のシベリア抑留における音楽や文化についての研究成果を大学のホールや博物館等の会場で一般に開かれた形で提示するアウトリーチ活動である。同時に、本企画の遂行によって研究をより深め、進展させる。</p> <p>本研究の目玉は、これまで収集した様々な手記・回想録などに記述される楽器製作についての情報(素材・製法等)と、ロシア公文書館所蔵のアルバム中にある楽劇団の楽器の実物の写真を調査・分析し、それらを総合させて一つの楽器を創り出すことである。寒い地域にしかない白樺という普通のヴァイオリンには使用されない木材や、電線から作られた弦、ボディの木材が足りず音が小さすぎることを補うために旋盤工が背面にジョイントさせたラップ。これらを融合させてできたユニークな手作り楽器から出る音はどのようなものなのかを、研究成果として現実世界で「見」「聴き」「触れる」ことのできるものへと具現化させ、収容所で鳴り響いた音風景を再現する。</p> <p>アウトリーチの実現のために、展示については総務省委託の平和祈念展示資料館、舞鶴引揚記念館に働きかけ、それぞれの企画展内でティアップ企画として参入させていただくこととなった。また、大東文化大学での学生・一般向けのレクチャーコンサートの映像、および楽器制作についてヴァイオリン製作者との紹介ビデオを編集し、資料館内で期間中毎日放映した。舞鶴引揚記念館では展示期間中にレクチャーコンサートも開催した。</p> <p><b>【プロジェクト名】</b>「深淵から光へ:シベリア抑留の音楽と藝術、記憶と未来への継承」</p> <p>「深淵から光へ」という題名は、元シベリア抑留者の画家香月泰男のシベリア・シリーズより「青い太陽」という作品にインスピレーションを得ている。小さな蟻の視点から地の底から空を見上げると、太陽が青く見えるという内容からこのコンセプトを着想した。</p> <p><b>【会場】</b>平和祈念展示資料館(総務省委託)企画展「シベリアでの出会いー抑留者の心に残った異国の人と文化」</p> <p><b>【展示内容】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① シベリア抑留中に各地の収容所で創作された手工楽器の記憶・記録から製作した再現楽器「ラップ付きヴァイオリン」を展示し、実際に楽器を演奏した音源を iPad から流す演出をした。また、収容所内で配布された歌集に収録される歌をバリトン歌手の古川精一氏の協力のもとスタジオ録音し、iPad から音源を視聴可能にして展示を行った。</li> <li>② シベリア抑留中の日本人の文化活動について、歌が生まれた土地や楽劇団があった場所などを分布図にして地図や様々な資料を展示物として紹介した。</li> <li>③ 作品「深淵から光へ」ロシアの作曲家ズヴォリンスキー(協力者)がシベリア抑留の記録映像、絵画作品、歌などから構想する音楽映像作品、A I やライブエレクトロニクスなど最先端のテクノロジーを使った本プロジェクトのための創作、実際歌われた歌のメロディや詩・元抑留者のインタビューなどから作品とする。(ライブエレクトロニクスを使った作品と、生楽器のアンサンブルのための作品を製作。)</li> </ol> <p><b>【レクチャーコンサート】</b>「シベリア抑留の音楽・文化ー記憶の継承へ」</p> <p>資料館のほか大東文化大学のホールなどでパネルとともにレクチャーコンサートを開催した。</p>
---------	--

研究結果	<p>計画の段階でヴァイオリン製作以来の候補となっていたカザフスタンの民族楽器工房は閉鎖中であり、また新型コロナ禍で材料輸送などの問題があったため、国内でストローヴァイオリンや古楽器の製作・修復経験のあるヴァイオリン製作者を探したところ、福岡で弦楽器工房を営む中嶋卓氏が見つかり、ヴァイオリン製作を依頼した。ハバロフスクの収容所で作られた小型のラップ付きヴァイオリンを構想の基盤とし、多数ある元シベリア抑留者の手記・体験記に記述された製法・材料などを集積し具体的な工程について中嶋氏とオンラインミーティングを重ねて決定した。今回の復元楽器製作の過程では、ロシアの軍事公文書館所蔵のイルクーツク州タイシエツト第7地区収容所の「新声楽劇団」の楽器の写真や、ハバロフスクの捕虜生活を収めた写真アルバムに所蔵の楽器工房でヴァイオリン製作をする人々の写真について、ヴァイオリン製作の専門家の視点から、創られた楽器の特徴(ヴァイオリンの渦巻が通常2重ではなく、1重になっている、f字孔の作り方の特徴、ウイング部分のエッジの角度)の詳細が明らかとなった。</p> <p>また、平和祈念展示資料館での企画展について新聞記事になったことから、記事を読んだ遺族からシベリアから持ち込まれた貴重な楽器が複数寄贈され、この楽器について調査を行った。その結果、寄贈された古楽器のバゾンに刻まれた文字の調査から、ブリュッセルの工房で作られ、帝政ロシアの軍楽隊で使われたのち、シベリアの収容所へ移動し、日本に持ち込まれたという120年の楽器の移動の歴史を紐解くことができたのは大きな副産物であった(添付資料)。</p> <p>また、舞鶴市の協力を得て舞鶴引揚記念館で展示とレクチャーコンサートを行ったことから、地域の若浦中学校と東舞鶴高校での講演会の機会を得るなど多様なアウトリーチ活動が実現できた。この他、ロシアの国際歴史学会にてオンラインでの発表及び論文集への論文掲載を行った。</p>
------	--

今後の課題	<p>歴史を語る当事者なき時代、残された手記・体験記・作品などが歴史継承、歴史理解の主要となっていくが、今回の研究活動を通じて残された公文書や手記から当時の実際の作品を修復し初演する、あるいは再現楽器で歴史の「見える」「聞ける」「触れる」化という体験型の歴史継承ツールの有用性が実証された。</p> <p>だが、コロナ禍での展示においてはiPadからの音源は来訪者が触って決めるのではなく、常時音を流れる仕様にする、楽器は触ることは叶わずガラスケースの中での展示となった。今後の機会では実際に楽器に触れられる展示を行いたい。また、当初予定されていた絵画作品の展示は、楽器製作にかかる予算と香月泰男の生誕年での巡回展示といったスケジュール的な理由から実現できなかったため、今後、シベリア抑留の音楽・芸術作品をまとめて展示する企画展を改めて計画したい。</p> <p>また、歴史継承において芸術という観点から研究を行うことが、他の歴史研究と相違する大きな点は、文化・芸術による人と人との温かな関わりや、当事者が何を精神的な支えとしていたかといった内面世界を理解するものであり、暗い負の歴史の中の一筋の光についての研究であるということが改めて見えてきた。助成期間中、目の前で起きている戦争に対して、芸術が持つ力とは何かと改めて考えさせられたが、政治的な面から分断された国と国の中にいる人と人とのつながりが音楽・芸術によってポジティブに変わっていく、国際理解のためのソフトパワーとしての可能性について今後さらに注目し、日本人のシベリア抑留に限定せず「戦争と音楽、音楽と平和」、そして「社会におけるアート」、「芸術と人間」をキーワードとして、より広範で普遍性のある研究を進めていきたい。</p>
-------	--